

Freeflow®がもたらす 尿流量検査のレボリューション

Free flow® を採用することで、尿流量検査における課題をどのように解決されたかを杉田先生(こんどう整形外科)に伺いました。

今までは困難だった“少ない”尿量でも検査が可能！！

当院では、主に前立腺肥大症に伴う男性の排尿障害をターゲットとし薬物療法や日帰りでの経尿道的水蒸気治療(WAVE)を行っています。

患者さんへの治療に対する効果判定の一つとして尿流量検査を行っています。特に治療前は尿量が少なく従来の尿流量測定器では測定不能となってしまう事例が多々ありました。

その点、Free flow® は10ml以下の極少の尿量でも正確に測定が行えるため治療前後の評価に役立っています。(写真1参照)

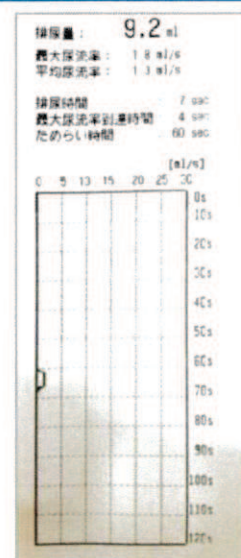


写真1

尿流量検査と尿検査を一度に行いたい！

日々の診療では尿流量検査と尿検査を同日に行う場合が少なからずあると思います。その際、患者さんに2度排尿してもらうことは患者さんのみならず医療者側もストレスです。Free flow® は排出した尿が機器の下からそのまま出る仕組みとなっているため容器に受けることで尿流量検査と尿検査の同時施行が可能となります。従来は尿流量検査もしくは尿検査したあとに尿がたまるのを待ってもう一方の検査を行っていましたが同時施行が可能となったことで診察効率も向上します。

現在、検尿カップ(滅菌での検査対応可能)をFree flow® に直接接続できるアタッチメントを共同開発中ですので乞うご期待ください！(写真2参照)



写真2

採算性についてコスパよし！

当院では2022年11月の泌尿器科新設時よりFree flow®を導入し、2023年5月までの半年間で64件の尿流量検査を実施しました。尿流量検査の診療報酬は205点/件で、Free flow®を導入した場合は年間88件以上の検査を実施すれば利益化されます(表1参照、機器の耐用年数は5年とし計算)。これを当院に当てはめると、3年程度で導入コストを回収し利益化できる見込みです。

一般的な据付型測定器の場合、導入コストを回収するためには年間730件以上もの尿流量検査を行わなければならない計算となってしまいます(表1参照、機器の耐用年数は5年とし計算)。

また、導入コスト以外にFree flow®にかかる保守費用については、年間5万円なためランニングコストもコスパよし！と言えます。(詳しい保守内容については担当者にお問い合わせください。)

機種	導入コスト	回収に要する検査件数	年間必要検査件数
Freeflow®	90万円 (定価)	440件	88件 (耐用年数5年)
(例)据付型測定器	750万円 (製品価格+工事費)	3,659件	732件 (耐用年数5年)

表 1

操作や管理も簡単！だれでもすぐ使いこなせます！

昨今、医療機器の高度化に伴いその操作方法を習得することが看護師さんなどメディカルへの負担となっている場合が少なくありません。その点、Free flow®は「患者さん自身に操作してもらう」ことをコンセプトとし開発された機械なため操作ボタンは3つ(測定の開始/停止ボタン・F1ボタン・F2ボタン)とシンプルなデザインになっています(写真3参照)。またパーツは組み立て式ですが、その組み立ても非常に簡単で、本体部以外のパーツは基本的に水で洗浄可能です(本体部も水での洗浄は可能ですが万が一水が入ると故障の原因となりますのでアルコールなどでの清拭をおすすめします)。据付型測定器を使用することで一つ厄介なことは、「男性が立位で排尿する際の周囲への尿の飛散問題」ではないでしょうか。

Free flow®は陰部をカップに近接させた状態で排尿し検査を行うため尿の排出口さえ便器内など適切な場所になるようにすれば、この「飛散問題」を解決することができます。「飛散」を「悲惨」な問題にしないためにもFree flow®は貢献できると思います。



写真3